6. 本郷地区における「人づくり」と「関係づくり」による信頼関係と地域力の増強

松本市地域づくりインターン第３期生・本郷地区担当　槇石 和直

1. 本郷地区の地域課題と背景

1－1　研究の背景

現在、日本では様々な解決すべき課題がある中、全国的な少子高齢化社会への進行も特に深刻な問題となっている。少子高齢化社会は、日本の総人口を長期的に減少させることにつながり、労働者人口や、都市の過疎化など日本の社会に大きな影響を与えている。この高齢化の波は徐々に都市部にも広がっており、都市部での高齢者の退職後は地元へのＵターンなどを考慮すると今後待ち受ける高齢化社会に備え都市の機能や高齢者、地域などとの関わりに変化が生じることが考えられる。

そうした現状を踏まえ地方都市に目を向けると、やはり高齢化率と過疎化の影響が浮き彫りになってきている。これは地方の若年世代の流出による人口の減少にはじまり空き家問題や、公共交通機関使用率低下による路線の廃止など、単純な人口の高齢化だけでなくその問題は「少子高齢化」という起源から徐々に形を変えながら様々な問題へと枝分かれし、地元住民の生活に少なからず影響をあたえていることが窺える。こうしたひとつの「少子高齢化」という課題から、これからの地域をどう「支えていくか」ということは、現在の我々が考えるべき事柄のひとつだ。

1－2　本郷地区の概要

本郷地区は、松本市の東北に位置し中心部には古い歴史を持つ浅間温泉がある。人口は、14,229人であり、これは松本市内35地区中6位にあたる。面積の83％を山地が占めている。地域課題としては、人口の高齢化が挙げられており、地区人口における65歳以上の高齢者は約4千人で本郷地区全体の約30％に値する（内75歳以上は約2千3百人）。本郷地区は町会数が26町会あるが、特に高い高齢化率が課題となっている町会が複数あり、その中でも浅間温泉第2町会は、高齢化率50％を超え、今後の人口減少も懸念される。さらに、本郷地区は町会未加入の大学生の人口も多いと考えられるため、移動人口を除く実質定住人口における高齢化率はより高いものと予想される。

1－3　本郷地区の課題背景とこれまでの住民の取り組み

本郷地区では過去に松本市社会福祉協議会ボランティア部会、松本市赤十字奉仕団本郷分団が存在していた。この奉仕団は「他を思いやる心を行動に移す」を目的に活動を行ってきた団体で、過去には平成14年3月21日に発生した松本市本郷地区森林火災時の炊き出しを始め、本郷地区の高齢者の見守りなどといった本郷地区に欠かせない「情報ネットワーク」としても活動していたが、近年（平成27年）高齢化により解散してしまう。

大変惜しまれた奉仕団の解散であったが、あらためて地域住民の支え合い活動を活性化すべく、平成27年度の地域ケア会議にて社会福祉協議会四賀地区センターの山岸勝子課長による四賀地区の支え合い事業の取り組みについての講演を実施した。平成28年度における同会議では「地域で考える（支える）包括ケアシステムとは」というテーマでの信州大学経法学部の井上信宏教授の講演を行った。こうした勉強会を通じ様々な刺激を受けた本郷地区住民は、町会での福祉の取り組みの発表とともに参加者の意識付けなどの情報共有を図ることで、高齢者の見守りや居場所作りなどを中心にどのような対策を行うべきかが話し合われてきた。

本郷地区の見守りや居場所づくりを考えた場合、地域には「高齢者が集まれる気軽な居場所がない」という課題があった。地域ケア会議では、「地区の中でも町会により高齢者人口に差がある」、「近くに集まる場所がない」といった課題があることが明確になった。こうした課題を踏まえ参加者からは、「この状況を何とかしなければ」そして「高齢者などが気軽に集える場所を作ら

なければ」との思いが強くなった。

地域に対する課題の具体策、解決方法、実践内容等が話し合われ、「本郷地区ささえあい講座」で地域ボランティアの養成を目的とした御代田町での視察を行った。御代田町では住民が中心となるサロンを見学した。このような経緯から、その後「自分たちには何ができるのか」をテーマにグループワークを行った。そうした、いくつかの講座を受けた受講者の中で「支え合い活動」を続けていこうという声が大きくなり、一度消滅していた本郷地区ボランティア協議会を新たに立ち上げ、通称「ささえあいの会」が平成29年3月に発足した。

1－4　研究目的

「地域の居場所」という点において、代表的なものとして挙げられるのは松本市独自の事業でもある「福祉ひろば」がそのひとつであるといえる。

本郷地区においても「本郷地区ふくしひろば」と「松本市福祉施設本郷地区 南郷福祉ひろば」の2ヶ所の福祉ひろばがある。「福祉ひろば」は1995（平成7）年から開始されたコミュニティを単位とする松本市独自の地域福祉事業である。「福祉ひろば」は健康な老人の生きがい創造の場として位置づけられ、既存の地区公民館の生涯学習活動と連携しながら、地区福祉を推進していく「福祉の拠点」として位置づけられている。「福祉の拠点」として地域に置かれている「福祉ひろば」であるが、本郷地区においては本郷独自の課題を抱えている点が挙げられる。具体的な課題としては、以下の2点が指摘されている。

1)「福祉ひろば」は住民の「たまり場」として機能しているが、正確には「一部の住民のたまり場」と化してしまっているとの批判もある。
2)2ヶ所ある「福祉ひろば」の存在により地域が分断されているとの批判もある。

本郷地区においては福祉ひろばの利用率は高い割合を占めている。土日、祝日を除きほぼ毎日どちらの福祉ひろばも利用団体の行事や、ふれあい健康教室などの企画がされている。こうした日々の「ひろば」のあり方は本来の目的である「福祉の拠点」としての役割が成されているように感じられる。しかし、一方で一部の住民には「福祉ひろば」は入りづらい、利用しづらいと認識されている。これは利用団体の「サークル」としての個性の強さや「福祉ひろば」という箱庭の中で磨かれるメンバー間の交友関係が「福祉ひろば」の敷居を高くしていように感じられる節がある。

また、「地域の分断」においても、この主体的に利用するメンバーの固定化が加速しており、一部では「〝ひろば〟はもういい」という声も聞くこともあった。こうした「福祉ひろば」の「敷居の高さ」は下記でも触れる町会、団体サロンの参加者から実際にお聞きした話からも窺うことができ、本郷地区の「福祉ひろば」の直面する課題でもある。

「福祉ひろば」は、「ひろばコーディネーター」のサポートによって運営されている。こうした形態のもと、囲碁、将棋、麻雀、手編み教室などを目的としたサークルの方たちが「ひろば」をひとつの居場所として利用している。これは一部の方たちの「たまり場」として機能していることを考えれば、「居場所」として機能しているといえる。

一方こうした「福祉ひろば」のケースから本郷地区で立ち上がる町会、団体サロンを考察すると、本郷地区におけるサロンは住民が立ち上げる「開かれた縁側」であることがわかってきた。本郷地区でのサロンは、住民が「居場所の不足」や「高齢化」といった地域課題に対して住民が主体となって取り組む活動のある種の集大成であるといえる。町会内でこのようなサロンが立ち上がっていく体制が整ってきたのは、各町会内の住民が自主的に地域課題について学ぶ自主性からなされてきた「人づくり」と、声を掛け合うことで実行に移せる「関係づくり」が培われてきたからだと考えることができる。

このような住民の自主性からなるサロンづくりから、本研究のテーマは主体的に動く住民、「人づくり」と地域コミュニティをより太くする「関係づくり」であると考える。よってこれら2つの視点から分析、考察を行っていきたい。

本郷地区ではボランティア協議会の新たな立ち上がりを始め、先に述べた「高齢化」が地域課題のひとつとして重要視されてきた。地区の「高齢化」に際して、住民が自ら立ち上がり課題に対して理解を深め、実行に移すための勉強会を行ってきた。そんな目的も持ったボランティア協議会「ささえあいの会」は、主に町会長や民生委員

を始めとした地域を引っ張る役割の方たちを中心に構成されている。地域を動かすことの意識付けなどを踏まえ地域課題から勉強会を行い、ボランティア協議会の結成へと至り現在では、地区の課題に対してどうすべきかを考えられる人材の養成が成されている。そうしたことから「ささえあいの会」は地域力の基盤となる「人づくり」が既に行われているといえる。

私が本郷地区の地域づくりインターンとして担当することとなった平成29年4月は、ボランティア協議会昨年28年度3月に「ささえあいの会」が結成されて間もない時期でもあり、いわばボランティア協議会の新たなスタートでもあった。私はこの新たな組織に事務局としての関わりを始め、5月を境に積極的に立ち上げられていった町会、団体サロンを中心にサロンの記録、見学を目的に地域づくりインターンとして活動を行った。この各サロンでは、私自身を含め、サロン内での参加者、住民、ボランティアスタッフ3者の「関係づくり」が成り立っていた。

このように「人づくり」と「関係づくり」を地盤とした本郷地区を支えるふたつのキーワードをよりしっかりと結びつけることで本郷地区の地域づくりは更に新たな段階へとすすめるのではないかと考える。

2. 地域づくりインターンとして取り組んだ事業の概要

本年度は、地域づくりインターンとして「本郷地区ボランティア協議会・ささえあいの会」の事務局としての参加を皮切りに、本郷地区の「サロン活動の記録」を目的とした本郷地区住民との交流を行ってきた。この地域住民の活動への参加や記録の収集は私自身が地区への理解や、実行していくべき内容を自身で設定していくと共に、地区での活動に一貫性を持たせ、私という新しい存在（地域づくりインターン）を本郷地区で理解してもうという狙いもあった。

なぜ「私を理解してもらう」からなのか。これは、長らくその土地に暮らす方たちと私という新参者に対する壁を少しでも薄くするためであり、もっと言えば「よくわからない立場の人」という印象を少しでもなくし、「関係づくり」の第一歩を進めるためでもあった。

この「関係づくり」は恒例行事や新しい行事であったり何を始めるにあたっても理解を得るための重要なポイントとなる。小さな関りでも少しずつ積み重ねることでいざというときの声掛けや、持ちつ持たれつの関係が築ける。具体的には本郷地区ボランティア協議会「ささえあいの会」事務局としての取り組みから地域づくりセンター、公民館、福士ひろば、社会福祉協議会、北部包括支援センターなどすでに地域の輪に組み込まれているいわゆる「常連」の方たちの力を借りることで、地域づくりインターンとして徐々に理解を得ていくということを目指した。

3. 実践事業考察

3－1　ビデオクリップ制作

本郷地区では昨年、平成29年度から福祉計画の大きな見直しに伴い、課題集約が成された。課題は大きく分けて4つのものが挙げられている。①町会福祉の推進②高齢化、障害者の安心・安全な暮らし③子どもの健全育成④ボランティア活動の推進である。

わたしは地域づくりインターンと「ささえあいの会」事務局としてこの②における情報発信をテーマに、本郷地区それぞれのサロン活動を紹介する目的でビデオカメラでの撮影を行った。このビデオの映像は、上記で触れたサロンの情報発信を目的として作り上げたもので、1ヵ所約3分程度のものを目安に編集作業も行い、本郷地区のサロンを紹介するビデオクリップとして仕上げた。

このビデオクリップは、平成29年10月19日に行われた「本郷地区地域ケア会議」と同年12月4日に開催した「本郷地区サロン・ボランティア交流会」で上映された。

「本郷地区地域ケア会議」では、1ヶ所のビデオを流した後、実際にサロンに携わるボランティアの方の話を聞くという時間を設けることとした。その点を踏まえ私は、ビデオではサロンの雰囲気が、「おおよそ」伝わるように心がけ概要説明も字幕を使ったシンプルなものに抑えた。また、「おおよそ伝える」とはビデオクリップそのものでは、サロンの詳しい概要や内容には触れず、映像での説明を控えることで、視聴者の疑問をそのまま「生の声」として議論の場に組み込むように工夫をした。また、より詳しいサロンの概要は、当事者であるボランティアの皆さんに直接語っ

ていただき、サロンに関する説明に厚みを持たせるよう意識した。ビデオクリップは議論をかわすための素材とし、町会、団体同士の交流を盛り上げるための道具として活用した。

ビデオクリップの制作と活用は、これまで本郷地区の「居場所作り」に際してこうした情報発信の手法がとられていなかっただけに、得られる反響は大きかった。それぞれのサロンの様子を映像として捉えることにより視聴者が、客観的にサロンがどういったものなのか理解するきっかけを設けることができた。

このビデオクリップは別の側面でも影響を与えていた。その影響とは、一部の町会の民生委員さんから出た話で、ビデオクリップを視聴された人の中には「サロンを自主的にではなく、強制的にやらなければいけないものなのか」という声や「サロンを活発に行っていこうという周りの勢いに息苦しさを感じる方達もいる」という話であった。居場所づくりは強制されて実行するものではない。あくまで地域住民が自主的に「居場所が必要だ」と考えなければ最初の一歩であるといえない。私のビデオクリップ制作の意図にはその最初の一歩を踏み出していただきたいという思いもあった。しかし、この負担に感じた方たちのいるケースにおいては私のような第三者によって制作されたビデオを視聴し、そこに住む方たちが「居場所づくりに対して負担に感じた」という結果につながってしまったのである。であれば、今後は情報発信として別の方法も検討し、また異なった方面から居場所作りにおける魅力を伝えられるような工夫が必要であるといえる。

サロンのような「居場所づくり」はその地域の住民の意識により積極的であるか消極的であるかで、その居場所のなす効力もおのずと変わってくる。地域の縁側として、交流や見守りの場としての効果が誰かに「強制」されることは地域の負担になってしまう。

重要なのは規模や、名称などではなく交流できる場があるということであり、地域に住む人々がその「居場所」を上手く有効活用できることで価値が見出される。

本郷地区の地域課題である「高齢化」を考えれば、重要視されるのは見守り、安否確認、交流を目的とすることだ。こういった目的意識に際して場所のスケールや数は問題ではなく、質や気軽さが大切になってくる。

居場所が求められるのは、地域で廃れつつあった安否確認や気軽に集い楽しいひと時を過ごすことのできる場所に需要があるからである。廃れてしまっていたり、希薄になりつつある近所付き合いという課題を考慮すれば、やはり居場所作りにおける情報発信は求められており、映像は直感的にイメージを感じ取ることに最適な手段の一つであることは間違いない。しかし、現状において一部では「負担」といったマイナス面があることも事実である。考えられる手段としてはビデオクリップ内の表現方法や一つのサロンに対する情報量を増やし、視聴者がより理解しやすくサロンは気軽なものであるというように理解していただけるような内容を考えていく必要がる。

3－2　サロン・ボランティア交流会

上記で述べた「本郷地区地域ケア会議」では、サロン活動を広く知ってもらうことを主題としていた。参加者の層も幅広く、町会や市の職員をはじめ、NPO法人関係の方など多種多様な方が大勢参加されていた。サロンに関わっている方も参加されていたが、サロン運営についての議論が交わせたかどうかは個人差があった。

「地域ケア会議」は、本郷地区のサロン活動を地区全体に周知してもらう場としては適していたが、「サロンについて意見交換する」というテーマを考えた場合、参加者の目的の差異から限界があった。そこで私は、ビデオクリップ制作を進める一方で、町会や地域のサロンの関係者やサロン活動に興味のある方にターゲットを絞った「本郷地区サロン・ボランティア交流会」を企画した。

本郷地区のサロンの中には、10年以上の歴史を持つ町会の伝統行事のようなサロンもあるが、ほとんどは結成されて1年未満のものが多い。また、これから町会サロンを開催したいという声も聞くことがあった。そういった状況の中開催された「本郷地区サロン・ボランティア交流会」は、地域ケア会議にて使用したビデオクリップの上映の他にサロンに雰囲気を近づけるための工夫として当日にお菓子や、お茶などを用意して座談会を行うことで、日ごろの町会や団体の枠を超えて交流を深めることに成功した。当日は参加者を対象としたアンケート（4. 参考資料一覧

にて添付）を実施した。このアンケートでは主に今回の交流会についての満足度などを中心に質問を用意し、参加者の中でも大きく目的が分かれていた「既にサロン活動に参加されている人」と「サロン活動に興味がある人」それぞれで交流会に参加することで目的は達成することはできたかなどについてもアンケートの質問として組み込んだ。この目的の違いとは、「他サロンでは何をしているのか知りたい」参加者と「自分の町会でもサロンを開催したいためにサロンを知りたい」参加者の大きく分けて2種類の考えをもたれている方たちが参加していた。一見するとどちらもサロン活動に興味をもたれている方たちだが、ニーズの達成目的は各々異なりがあった。

一方でサロン・ボランティア交流会の目的の意図のひとつとしては町会の垣根を越えたサロン同士の交流のきっかけをつくり、サロンに携わるボランティアの皆さん同士の連携を太くするということも目的にしていた。これは今回の「サロン・ボランティア交流会」に限らず、本郷地区の「地域福祉計画・活動計画」の中でも「町会の垣根を越えた居場所における担い手作り」として項目が挙げられていることからも本郷地区で求められていた企画でもあった。

そうしたことから交流会内では各団体同士で刺激を受けてもらい、それぞれの活動により本郷地区全体でより活気づくきっかけになればと考えている。

さらに、サロンを立ち上げたいと考えている方たちには先に活動をしている町会からヒントをもらい、逆に既にサロンに関わっている人たちは自分のやっていることに自信を持ってもらうという狙いもあった。交流会後半に行われた座談会を通じサロン関係者から語られるこれまでの経験談がバックボーンとなり、会話に盛り上がりを見せていた。

また、本郷地区の住民は地域課題に対しての取り組みに非常に積極性がある。これは上記の1.「1－3 本郷地区の課題背景とこれまでの住民の取り組み」でも触れたとおりであり、勉強会や課題を見出すワークショップなどでの成果から地域活動への主な取り組みとして反映されている。その代表例が町会や団体サロンを含めた居場所作りであるといえる。この現状からも本郷地区では既に地域を支える人材「人づくり」が成されていることがわかる。この「地域を支える人材」とはボランティア協議会の会員の皆さんや、町会を含めた住民、町会長など地域の柱となるような方たちのことである。

私が本年度関わってきたのはそういった過去の経緯から成り立つ流れの中の出来事であり、既に動き出したものへの関わりだった。そのため、既に立ち上がっていた地元住民に着目しつつ、その人々同士をつなぐ「関係」が重要であるとの考えから「本郷地区地域ケア会議」や、「本郷地区サロン・ボランティア交流会」などを経て本郷地区のサロンについて情報共有と新たな関係を築くきっかけ作りを行った。

最近ではこの交流会の効果が徐々に現れてきており、一部の町会長のなかではサロンの参考のために見学をしに行きたいというような意見など、新たな進展が現れてきている。私が本郷地区でできることのひとつがこうした「関係づくり」のきっかけ作りなのであれば来年度以降もこうした情報発信を継続し地域を挙げて課題に取り組めるようなコミュニティを目指していきたい。

4. まとめ

ここまで「人づくり」と「関係づくり」について述べてきた。この2つのテーマは私が本郷地区で地域を研究する点において意識し続けたいことでもある。この2つのテーマを主軸に今後も本郷地区の地域づくりインターンとして活動に取り組みたい。また、新たな展開として「継続」と「新規」も意識した活動を行っていきたい。これは、1年目私が関わってきた事業や活動の持続と新たな動きが見られる地域での新しい取り組みへの関わりという点から設定している目標である。

それぞれ解説をすると、まず「継続」の面ではサロンに関する情報発信と「ささえあいの会」事務局としての取り組みが主に当てはまる。「ささえあいの会」での活動を通じビデオクリップ制作を行ってきたことで私自身が間接的に本郷地区における住民の活動を知る機会を得ることができ、「地区を知る」という上で大きな意味を成していた。この「地区を知る」というのは私に限らず、活動を知ることのなかった本郷地区の人々にも当てはまっており、上記で述べた「本郷地区地域ケア会議」や「本郷地区サロン・ボランティア交流会」などにおける参加者の傾向からもか

らもサロン活動を開始するためのヒントを得たい方、今後のサロンにおける新しいアイディアなどを知りたいという意思を感じることができた。

このようなことから、情報の発信と共有は住民の活動を支えていくために必要なことであり、「1－4 研究目的」における現状の「福祉ひろば」や「町会、団体サロン」のあり方からも場所や規模にとらわれず必要であれば、「何処でも誰でも「居場所」は立ち上げることができる。」という考えに繋がればと思う。また、本郷を知りいまの本郷地区が抱える地域課題とは何なのかを改めて地域住民とともに考えていくため、ビデオクリップの改良や新たな交流会の企画より活動の継続を図り、本郷地区の課題を見据えていきたい。

「新規」に関する取り組みとして、今後の展開はサロンにおける情報発信の継続を含め、サロン活動にとどまらず、より大きな視野をもって地域と関わりを持っていきたい。

また、浅間温泉の旅館組合が主体となって立ち上げる「タビオコシ会」というものがある。こちらの会は主に浅間温泉活性化を目的とした団体であり平成29年においてはこの「タビオコシ会」主催の枕投げ大会などを中心に斬新な発想で旅館組合だけでなく、学生や地元住民も巻き込んだ企画を運営するなど、地域に根付いた町おこしをされている。私はそんな「タビオコシ会」に平成30年の第1回目の定例会から関わり始めている。

地域の若い世代が中心となり新たな活動に着手するという目的の中、地元住民が主体的に動くことで生じる地域への変化であったり、「ささえあいの会」とはまた違った新たな「人づくり」の場に関わることで、地域づくりインターンとして新たな地域づくりにおける「人づくり」の変化へ立ち合い、本郷地区のもうひとつの顔でもある観光にも関わりながら本郷地区における地域づくりを考えていきたい。

参考図書

・レイ・オルデンバーグ 忠平美幸訳/マイク・モランスキー解説『「サードプレイス」コミュニティの核となる「とびきり心地よい場所」』みすず書房 2013年10月25日発行
・石破茂/弘兼憲史「どうする？どうなる？日本の大問題少子〝超、高齢化編」ワニブックス　2017年9月6日
・東京大学ジェロントロシー・コンソーシアム「2030年超高齢未来破綻を防ぐ10のプラン」東京経済新報社2012年9月1日
・松本大学白戸ゼミナール「平成28年度 松本大学（知）の拠点事業まちづくり実習会・買い物支援事業報告書～「居場所」からはじまる地域づくりの可能性」

参考文献

・本郷地区地域福祉計画・活動計画（H30～34）具体的内容（取組み）
平成30年4月1日施行 本郷地区町会連合会

［資料］

本郷地区サロンビデオクリップ集（配布用DVD）

本郷地区地域ケア会議　様子（1）

本郷地区地域ケア会議　様子（2）

本郷地区サロン・ボランティア交流会　様子（1）

本郷地区サロン・ボランティア交流会　様子（2）

洞町会　サロン

浅間温泉第7町会　サロン

原町会　サロン

横田第7町会　サロン

浅間温泉第1町会　サロン

にこにこサロン

浅間温泉第2町会　サロン

（第３種郵便物認可）　松本市内

市民タイムス　平成２９年

にこにこサロン　住民集う

月２回開催　有志運営　本郷でスタート

サロンを訪れて会話を弾ませる住民たち

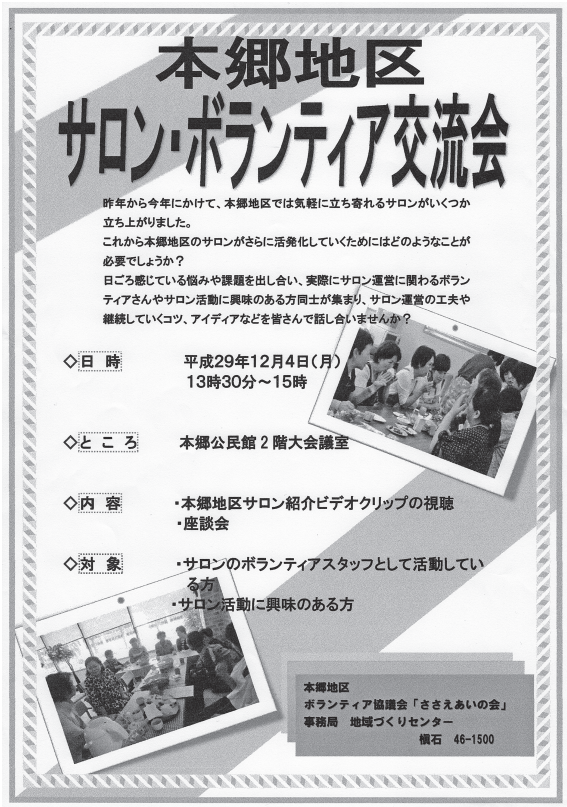
松本市本郷地区の住民ボランティア組織「にこにこ会」が運営する「地域の縁側にこにこサロン」が12日、開所した。高齢者や乳幼児連れの母親、若者など地区住民の誰もが気軽に立ち寄れる居場所を目指し、浅間温泉1の民間施設の一角を使って月2回開催していく。

初日に早速訪れた住民たちは、会のメンバーが手作りした焼き菓子や漬物、お茶を囲んで会話を弾ませた。家族の送迎で来場した上原下枝さん（84）＝大村＝は「外に出て人と話すと元気になれる。また来たい」と今後に期待していた。

にこにこ会は、市社会福祉協議会本郷支会が昨年度立ち上げたボランティア協議会（ささえあいの会）の一組織で、昨年7～12月に同支会が開講した「ささえあい講座」の受講者ら約10人で構成する。高齢者ら地域住民を支える担い手養成を目的とした講座の学びでサロンを着想した。にこにこ会の細野のり子会長（68）＝横田4＝は、認知症の人と地域住民が集い交流する「オレンジカフェ」の趣旨も念頭に「住民ニーズに沿った運営形態を探っていきたい」と話している。

次回は8月9日午前10時～午後3時に開く。問い合わせは本郷地区地域づくりセンター（☎0263・46・1500）へ。（横内里美）

平成29年7月23日
市民タイムスにこにこサロン記事



本郷地区
サロン・ボランティア交流会

昨年から今年にかけて、本郷地区では気軽に立ち寄れるサロンがいくつか立ち上がりました。
これから本郷地区のサロンがさらに活発化していくためにはどのようなことが必要でしょうか？
日ごろ感じている悩みや課題を出し合い、実際にサロン運営に関わるボランティアさんやサロン活動に興味のある方同士が集まり、サロン運営の工夫や継続していくコツ、アイディアなどを皆さんで話し合いませんか？

◇日　時　平成29年12月4日（月）
13時30分～15時

◇ところ　本郷公民館２階大会議室

◇内　容　・本郷地区サロン紹介ビデオクリップの視聴
・座談会

◇対　象　・サロンのボランティアスタッフとして活動している方
・サロン活動に興味のある方

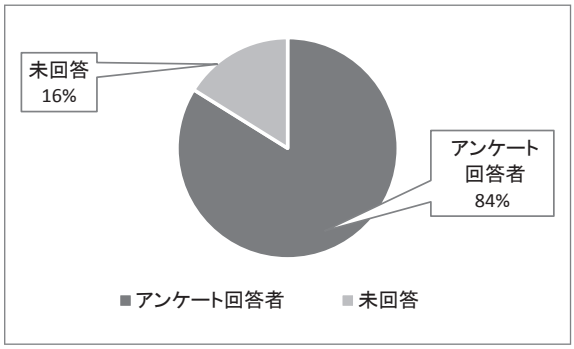
本郷地区
ボランティア協議会「ささえあいの会」
事務局　地域づくりセンター
槇石　46-1500

本郷地区サロン・ボランティア　交流会

サロン・ボランティア交流会 アンケート
平成29年度12月４日実施

1 全体の出席者とアンケート回答者の比率

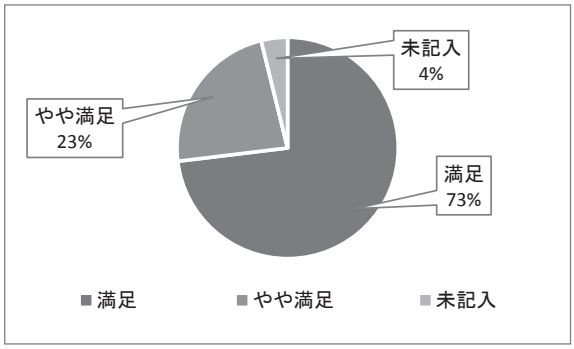
出席者	アンケート回答者	未回答
31	26	5



2 本日の交流会の満足度を教えて下さい。

満足	やや満足	満足しなかった	未記入
19	6	0	1

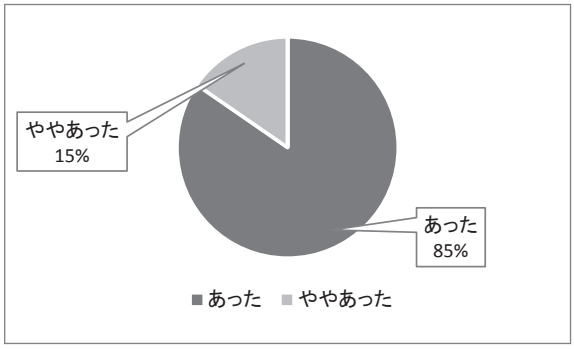
計26



3 今回の交流会を通じて今後に活かせることはありましたか？

あった	ややあった	なかった	未記入
22	4	0	0

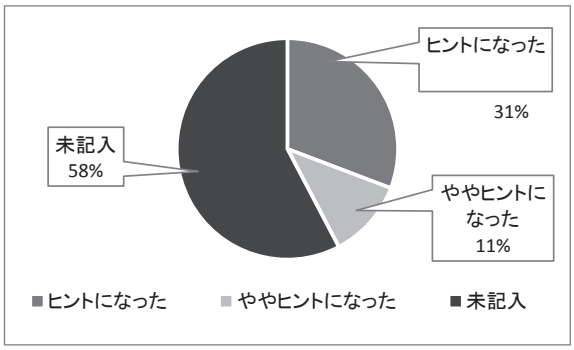
計26



4 現在のサロンに関わっている人にお聞きします。今回の交流会の体験はサロン活動を始める上でヒントになるものでしたか？

ヒントになった	ややヒントになった	ヒントにならなかった	未記入
8	3	0	15

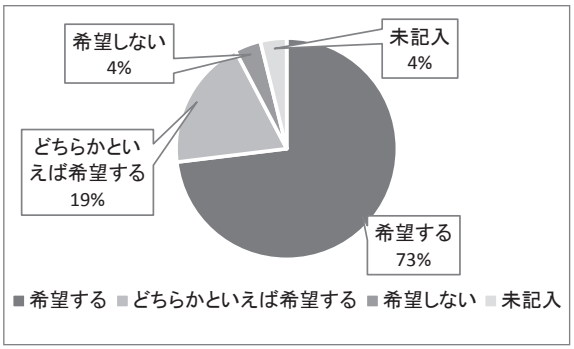
計26



5 次回（２回目以降）のサロンボランティア交流会は希望されますか？

希望する	どちらかといえば希望する	希望しない	未記入
19	5	1	1

計26



6 本日のテーマは「サロン」でした。今後、ボランティア交流会として取り上げたいテーマがあれば教えて下さい。

今後は交流会ではなくサロンの見学会をしたい
傾聴、見守りボランティア交流会の希望

などの意見が挙げられました。